

感謝の典礼(2)とりなしの祈り

2026年3月8日 クラレチアン宣教会 増田健

「現代の人々の喜びと希望、苦悩と不安、とくに貧しい人々とすべての苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、苦悩と不安でもある。真に人間的なことがらで、キリストの弟子たちの心に響かないものは何もない。なぜなら、彼らの共同体は人間によって構成されているのであり、彼らは、キリストにおいて一つに集められ、父の国に向かう旅路において聖霊によって導かれ、すべての人々に伝えるべき救いのメッセージを受けているからである。したがってこの共同体は、人類とその歴史とに現に深く連帯していると実感している。」（現代世界憲章1）

⇒神の愛の神秘を最もよく示し、キリスト者の心がひとつになる場であるはずのミサ（特に感謝の典礼）では、なおさら人々の喜びや悲しみ、希望や悩みが無視されるはずがない。

◇感謝の典礼の構成要素

- ①感謝（特に叙唱）、②応唱（特に感謝の賛歌）、③聖霊の働きを求める祈り（エピクレーシス）、④制定の叙述と聖別、⑤記念（アナムネーシス）、⑥奉献（父へ教会を奉献し、一致を願う）、⑦取り次ぎの祈り（天上と地上の全教会の交わり）、⑧結びの栄唱

⇒今回のテーマ：⑥奉献と⑦取り次ぎの祈り

◇第二奉献文におけるとりなしの祈り

◎奉献（父へ教会を奉献し、一致を願う）

聖なる父よ、わたしたちはいま、主イエスの死と復活の記念を行い、み前であなたに奉仕できることを感謝し、いのちのパンと救いの杯をささげます。キリストの御からだと御血にとともにあずかるわたしたちが、聖霊によって一つに結ばれますように。世界に広がるあなたの教会を思い起こし、教皇レオ十四世、わたしたちの司教〇〇〇〇、すべての奉仕者とともに、あなたの民をまことの愛で満たしてください。

◎取り次ぎの祈り（天上と地上の全教会の交わり）

〔（きょう）この世からあなたのもとに召された〇〇〇〇（姓名）を心に留めてください。洗礼によってキリストの死に結ばれた者が、その復活にも結ばれることができますように。〕また、復活の希望をもって眠りについたわたしたちの兄弟姉妹と、あなたのいつくしみのうちに亡くなったすべての人を心に留め、あなたの光の中に受け入れてください。いま、ここに集うわたしたちをあわれみ、神の母おとめマリアと聖ヨセフ、使徒とすべての時代の聖人とともに、永遠のいのちにあずからせてください。御子イエス・キリストを通して、あなたをほめたたえることができますように。

【第一部：とりなしの祈りの起源と意義】

◇とりなしの祈りの起源

①ユダヤ教の食事における賛美の祈り（ビルカット・ハ・マズン）

変更不可能な基本要素として A. 創造主であり歴史の担い手である神への賛美、B. 食事が祝福されるための祈願、C. 神の民であるイスラエルのためのとりなしの祈り（特にエルサレムの再建）。

②キリスト教古代教会の祈り

『十二使徒の教訓（ディダケー）』（1世紀末～2世紀）には、イスラエルのための祈りの代わりに、「神の愛による世界中のキリスト者の一致」と「神の国の完成」が願われる。

⇒この祈りはミサの中で発展していくが、時代と地域によって共同祈願や、奉納の時、もしくは奉献文の中で唱えられる。ローマ典礼では奉献文の中で発達する。

◇キリスト者にとっての「とりなし」の意味

①本来、御父の御前で人間のためにとりなすのはキリストのみ。人間はこれに関しては受動的。

⇒神はわたしたちを愛して、御子を惜しまずに与えられた。

⇒この愛ゆえに神は、御子（特に御子の十字架の死と復活）を通して、御父と御子の永遠の愛の交わりにわたしたちを招いてくださる。

②キリストのとりなしによって救われた人類は、能動的に神に応答していくために（＝祈るために）聖霊のとりなしを受け、神を「父」と呼ぶことができる。

③聖霊のうちに御子を通して御父と交わる恵みを受けた信仰者は、全人類がその恵みの喜びに与るよう、とりなしの祈りを捧げる（キリスト教の原則：無償で受けたものは、無償で分かち合う）。

◇とりなしの祈りとミサの終末論的性格

◎ミサは「過ぎ越しの神秘の記念」。キリストの死と復活による神の救い（過去の一回限りの出来事）に感謝する（エウカリスティア）と同時に、その救いの恵みが「いま、ここに」実現する場（ミサのいけにえ性）でもある。

◎同時に、旅する教会であるわたしたちにとって、「自らが現在抱えている現実」の不完全さを知っている（「もうすでに、でもまだ完成に向かっている」という終末論的緊張）。

⇒信仰者にとって、救いを感謝することと、自分たちや世界の悩みを神に捧げることは矛盾しない。

⇒パンとぶどう酒という平凡な食材が神のいのちそのものであるキリスト現存の場となるように、民が抱える具体的な悩みもまた神の救いの歴史の実現の場となると信じている。「イエスの十字架と復活によって実現したとりなしの恵み・いのち」が、エウカリスティアを祝う民とその一人ひとりに具体的に実現するという意味でのとりなしの祈り。

⇒一人ひとりの悩みや喜びを大切にしながらも、それは常に、キリストの十字架と復活によってひとつに集められた民の祈り。

◇とりなしの祈りの重要性の再確認

◎第二バチカン公会議で、共同祈願という古代教会の習慣の再興が求められた（典礼憲章第53）

⇒奉献文の中のとりなしの祈りを削除すべきかという議論に。（実際、ルーテル教会や聖公会では、とりなしの祈りは省くか、奉献文の外で唱える。）

☆第二バチカン公会議直後の議論：とりなしの祈りは奉献文にとって、無駄な重複、もしくは歴史の中で付け加えられた「非本質的なもの」なのか？

☆結論：奉献文が煩雑にならないように整理する必要があるかもしれない。しかし、とりなしの祈りは、奉献文が持ついけにえ性と堅く結ばれたものであり、共同祈願とは性質が本質的に異なる。

【第二部：とりなしの祈りの構成】

①教会の一致を願う祈り

「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。」（一コリント 10:16-17）

◎東方では昔から、自らの教会の主教や総主教のために、そして使徒的信仰を信じるすべての者たちのため、そして教会一致の貢献者としての皇帝のために祈る習慣があった。現代の正教会でも、総主教が他の総主教の名をエウカリスティアの中で記念するかどうか、交わりの証しになっている。

◎ローマ典礼では奉献文の中で信仰者の一致のため、また司教のために祈りが捧げられる。そしてさらに教皇の名が唱えられるのが特徴的。

⇒西方教会の中で分裂の危機が度々起こった時、教皇の名を唱えるかどうか、教皇との交わりを受け入れるか否かのしるしとして認識された。

◎特別な機会や季節に、奉献文の教会一致を願う祈りの中に付け加える祈りがある（主日、降誕祭とその八日間、主の公現、聖木曜日の主の晩餐ミサ、復活祭とその八日間、主の昇天、聖霊降臨の主日）。新しい日本語訳のミサ式次第では省かれている。

⇒「救いの歴史」と「共同体の現実と希望」がキリストにおいてひとつに結ばれる。

第二奉献文：（私訳）世界に広がるあなたの教会、キリストが死に勝利しわたしたちを死することのないそのいのちへと与らせた主日にここにお集めになった教会、教皇〇〇、わたしたちの司教〇〇、すべての奉仕者とともに、あなたの民をまことの愛で満たしてください。

②生者のための祈り

◎「奉納を供えた者のための祈り」（もしくは奉納を供えた者の意向を受けて、誰か〔家族、友人、困っている人〕のために共同体で捧げる祈り）を起源として発展。

⇒しかしこれは「神への供え物への応酬」ではない。ミサにおいて祝われるのは、イニシアティブをもってご自身を贈り物としてくださる神の愛。

⇒同時に、労働によって作られたパンやぶどう酒をキリストの御体と御血へとしてくださる神は、そのパンとぶどう酒を作り運んできた人々の苦労をも祝福してくださるといふ信頼。聖体が教会の一致の源であるならば、パンとぶどう酒を供えた者は「教会の一致に貢献した者」。

⇒ここから派生して、パンとぶどう酒とともに他の供え物、すなわち教会共同体そしてその中でも最も貧しい人々を支える農作物や金品を捧げる人、さらに慈善活動を行う人にまで及ぶという考えが発展する（のちの「意向ミサのための献金」につながる）。

◎ローマ典礼では 416 年ごろ教皇インノケンティウス一世によって、奉納の時ではなく、奉献文の中で唱えられることが明確化。

⇒聖なる救いの神秘が記念・実現される奉献文の中（inter sacra mysteria）においてこそ、その人の具体的な救いの恵みを願うことがふさわしい。

◎現代のローマ典礼

☆第二奉献文「いま、ここに集うわたしたちをあわれみ」

☆第三奉献文「あなたがここにお集めになったこの家族の願いを聞き入れてください。いつくしみ深い父よ、あなたの子がどこにいても、すべてあなたのもとに呼び寄せてください。」

☆第四奉献文「父よ、すべての人を心に留めてください。その人々のために、この供えものをささげます。」

☆第一奉献文だけ、教会共同体全体のみならず、生者の個人名を正式に唱えることができる。

「聖なる父よ、あなたに信頼する人々（〇〇〇〇）を心に留めてください。また、ここに集うすべての人を心に留めてください。その信仰と敬虔な心をあなたはご存じです。わたしたちとすべての親しい人々のためにこの賛美のいけにえをささげ、あがないと救いと平穏を願って、永遠のまことの神、あなたに祈ります。」

◎第一奉献文以外の奉献文でも、共同体の一員の大きな救いの祝い（洗礼、堅信、初聖体、結婚式、叙階式など）には、その者の名を「教会の一致を願う祈り」の後に唱える（新しい日本語訳のミサ次第では省かれている）。

例) 第二奉献文：成人洗礼で堅信も受けた時

きょう、洗礼と堅信によってあなたの家族に加えられた人々を顧み、すすんで御子に従う恵みをお与えください。

◎生者のための祈り（たとえば第二奉献文の「いま、ここに集うわたしたちをあわれみ」）は、諸聖人との交わりの中で祈られる。

⇒キリストにおいて、天も地も、時空も超えて信仰者がひとつになっている神秘をエウカリスティアは具現化する。

⇒とりなしの祈りは全信仰者・全教会共同体の使命であり、その使命を聖人たちは、信仰の家族である地上の教会のために特別なかたちで果たしている。

⇒聖人の名を唱える祈りは、聖人たちに向けられるものというよりは、神のいつくしみによって救われた聖人たち・天上の教会とひとつになって、神に捧げる祈りと賛美である。

（たとえば第二奉献文では、聖人の名を唱えた後に栄唱〔キリストによって…〕が続く。）

③死者のための祈り

◎天上の教会における神との交わり、そして地上の教会と天上の教会との交わりを信じる共同体は同様に、既に世を去った兄弟姉妹たちとの絆が死によって失われず、むしろキリストにおいてその交わりが完成することを信じる。

⇒死者は、自分たちの共同体に属する者でありながら、天上の教会へと向う存在。

◎ミサのいけにえ性との関係

⇒ミサにおいては、イエス・キリストの十字架の死と復活による贖い、すなわち「御子といういけにえによる神との和解」の恵みが現在化する。その恵みに死者が与るよう願う。

（第二奉献文：「洗礼によってキリストの死に結ばれた者が、その復活にも結ばれますように。」）

◎ローマ典礼においても古代から死者のための祈りは盛んに行われてきたが、奉献文に挿入されたのは11世紀以降。

⇒共同体の祈りであるミサ（とくに主日のミサ）が「一個人である死者のための祈り」になることへの心配が中世中期まで度々意識される。

⇒中世後期以降、「一個人の死者のためにミサを捧げる」という習慣が定着。しかし現代の典礼神学では、それも「共同体の祈り」であることが強調される。

第三奉献文（第二バチカン公会議に作られた奉献文）：特定の死者のためにミサがささげられる場合（きょう）この世からあなたのもとに召された〇〇〇〇（姓名）を心に留めてください。洗礼によってキリストの死に結ばれた者が、その復活にも結ばれることができますように。キリストは死者を復活させるとき、滅びゆくわたしたちのからだを、ご自分の栄光のからだに変えてくださいます。

また、亡くなったわたしたちの兄弟姉妹、み旨に従って生活し、いまはこの世を去ったすべての人を、あなたの国に受け入れてください。わたしたちもいつかその国で、いつまでもともにあなたの栄光にあずかり、喜びに満たされますように。そのときあなたは、わたしたちの目から涙をすべてぬぐいさり、わたしたちは神であるあなたをありのままに見て、永遠にあなたに似るものとなり、終わりなくあなたをたたえることができますのです。

【参照：意向ミサについて】

聖イグナチオ教会『信仰のしおり』〔Q39. 追悼ミサ・意向ミサとは何ですか?〕

追悼ミサは故人の冥福を祈って捧げていただくミサです。意向ミサはある重大なことについて特別に神様のご加護を祈り求めるために捧げていただくミサで、例えば平日のミサ中に死者のために祈って頂くことや、何か特別な記念日に祈って頂くことです。追悼ミサ・意向ミサをご希望の方は、ミサ献金を添えて教会事務室に希望日時を申し出てください。なお、追悼ミサ・意向ミサ共にミサ献金の決められた金額はありませんので、各自の事情を踏まえながら応分の金額を納めてください。

◎当然ながら、これはビジネスではない。神のあらゆる恵みは無償であり、その目に見える最も尊いかたちである秘跡も無償であるべき。教会は献金を強制しない（なおさら特に貧しい人に対して）。

◎しかし、意向ミサの献金は深い意味のある習慣。

☆共同体の一員（生者も死者も含む）の救いを願う教会共同体の交わり。

☆同時に、その共同体（共同体の生活、特に貧しい人の生活、また教会全体のために奉仕している司牧者の生活）を支えようと献金する信仰者。

⇒この神の民の交わりの祈りの中で、聖霊の働きにより、キリストによる救いの業が具現化・現在化する。神はこのように一致して捧げる神の民の願い・祈りを無視されないという信頼。

◎司祭は、この願いと献金を尊敬と責任をもって受け入れ、正確に記録し、きちんとその意向のためにミサを捧げる義務を負っている。（原則、主の降誕の祭日以外、司祭は日に一回のミサ意向献金のみを自分のものとして受け、その他は各教区の司教によって定められた目的のために寄託する。）

⇒ただし、2025年4月13日の教皇庁の教令により、司祭不足や司牧上の理由を考慮して（たとえば特定の日にしか信者が集えない場合など）、すべての献金者たちが同意した場合に限り、複数の意向を一回のミサで捧げることも可能。